

長州藩処分問題と薩摩藩

幕府・越前藩関係を中心に

町田 明広

はじめに

慶応元年（一八六五）五月十六日、征夷大将軍徳川家茂は長州藩征討のため陸路江戸城を進発し、閏五月二十二日に入京・参内、朝廷から大坂城に留まり一会桑勢力と協力の上、長州藩処分決定を命じる勅語が伝えられた。こうして家茂の滞坂は大義名分を持ち、江戸・京都に分断されていた幕府機構は、畿内政權とも言える政治体制を採るに至った。一方で幕府は、將軍進発の報に接した長州藩がその威光に屈して、服罪の使者を直ぐに派遣するものと捉えており、進発はしたものの、当初から武力発動に消極的であったことは否めない。しかし、期待した長州藩の服罪使は現れず、幕府軍は徒に滞坂を続けるのみで手詰りの状況に陥り、幕府権威の更なる失墜を招来する結果となった。

この時期、幕府に対する最大の抵抗勢力は薩摩藩であった。長州征伐後の幕府の矛先が薩摩藩に向かうことへの警戒心から、薩摩藩・島津久光は藩地に割拠して貿易の振興や軍事改革・武備充実による富国強兵を目指し始めており、幕府から距離を置いて将来の戦闘に備えるという「抗幕」志向を明確にしていた。一方で、武力を伴わない外交権の移行による事実上の幕府打倒、つまり幕府を廃する「廃幕」を企図していた。こうした薩摩藩の方針は、これ以降も藩として国事周旋の基本とされた。

九月十六日、將軍家茂は現状を朝廷の権威によって何とか打破しようとし、再征勅許の奏請のため上京した。そこに英・仏・蘭・米の四国連合艦隊が大坂湾に闖入し、条約勅許等を求める不測の事態が勃発し、これを好機と捉えた大久保一蔵は朝彦親王・関白二条斉敬への劇烈な談判に及んだが、一橋慶喜の政治力の前に屈して再征勅許となった。また、条

約勅許について、当初から幕府と一會桑勢力間で意思の疎通を著しく欠いて甚大な混乱を招き、朝廷による老中罷免、將軍家茂の辭職に發展した。家茂の辭意撤回に成功した一會桑勢力は、慶喜を中心に条約勅許を迫ったため、十月五日、遂に朝廷はそれを認めた。

こうした長州再征・通商条約の勅許に至る過程において、薩摩藩の抗暴姿勢がより鮮明となり、近衛忠房・正親町三条実愛と結んで長州再征の勅許反対、条約勅許を巡る衆議のための諸侯召命の周旋を猛烈に実行したため、朝彦親王や二条関白の不興を買い、更に一會桑勢力からも甚大な嫌疑をかけられた。他方、薩摩藩を埒外に置いて中央政局の運営はままならず、幕閣や一會桑勢力、とりわけ会津藩は薩摩藩に接近を試み、何とか自派への取り込みを図るため、深甚な腐心をせざるを得なかった。その際、頼りにされたのが薩摩藩と友好関係にあった越前藩・松平春嶽であった。

また、長州再征・通商条約の勅許後の国政上の最大の課題は長州藩処分決定および長州藩の対応であったが、その決定プロセスは幕閣間でも曖昧な状況にあった。そして、長州藩の出兵も読めず、加えてこうした事象に対して、どのように諸侯との合意形成を図るのかも見通しは全く立っていないかった。何より、こうした政局運営を円滑に運ぶためには最大の抵抗勢力である薩摩藩の懐柔も急務であった。

先行研究においては、この時期に盛んに行われた幕閣や会津藩による薩摩藩への懐柔アプローチの内容についての考察が不十分であり、かつ、老中板倉勝靜・小笠原長行を中心とした畿内政權が薩摩藩の真意を探り、かつ幕府への対決姿勢を緩和させるために越前藩・松平春嶽にその周旋を依頼した経緯や具体的な周旋活動については、ほとんど論及がなされていない。加えて、大目付永井尚志や小笠原老中といった幕府使者派遣に対する薩摩藩の認識や対応について不分明である。

本稿では、これらの諸問題について可能な限り考察を加え、慶応元年後半から翌二年（一八六六）の初めまでの中央政局における薩摩藩の動向を通じて、薩摩藩の抗暴志向の実態を明らかにする。加えて、越前藩の幕薩融和運動の実態を解明し、かつ、薩摩藩と越前藩との協調関係を考察して、この時期の西国有志諸侯の対幕府認識・政略がいかなるものであったのかを論証することを目的とする。

1 幕長交渉の進展と薩摩藩の動向

慶応元年九月二十日、幕府は長州再征・將軍進発の勅許を獲得し、その後、十月五日には通商条約も勅許された。これにより、兵庫開港問題は先送りされたものの、外交上の最大

の難問はクリアでき、幕府は長州藩問題に専心できる環境が整ったと判断した。十月十八日の朝議において、京都守護職松平容保・所司代松平定敬・老中小笠原長行は揃って参内し、取敢えず大小目付を広島に遣し、長州藩主毛利敬親・広封父子を糾問することを奏聞して聴許された。その上で、二十七日に幕府は芸州藩家老野村帯刀を二条城に召し、大目付永井尚志、目付戸川忠愛・松野孫八郎を広島に派遣し、藩主父子の伏罪に関して支藩主・宗家家老および奇兵隊幹部三四人を尋問させることになったので、十一月晦日までに該当者は広島参着を厳守せよとの命令の伝達を命じた。

十一月六日、永井らは大坂を発し、十六日に広島に到着した。この時、幕長間の斡旋のため、長州藩浪士赤欄武人・久留米藩浪士淵上郁太郎（慶応元年三月二十七日に大坂で捕縛）を釈放して同行させた。なお、情勢探索のため、永井の家臣として新選組隊長近藤勇、隊士武田観柳斎・伊東甲子太郎らの同行を許可した。永井は長州藩との交渉の連絡を芸州藩士でなく、近藤らに任せる算段をしており、その許可を長州藩側に求めたが、広島まで使者に同行していた広沢真臣に拒否されている。なお、尋問終了後の十二月十一日、近藤らは松原音三らの帰藩に同行することを求めたが、これも藩情が沈静していないとして拒絶され、十五日には新湊（周防国玖珂郡）に至り、吉川経幹との会見を求めたが、これも藩情

を事由に拒否され実現は叶わなかった。

一方で、幕府は軍事的圧力を背景に長州藩の服罪を引き出そうと思料し、十一月七日に大小目付を広島に派遣して長州藩の罪状を糾問し、その情勢に応じて進軍すべきことを布告し、かつ攻口の部署を定めた。芸州藩を安芸口第一陣、彦根・高田二藩を同中軍先鋒第一陣、津山・明石二藩を同中軍先鋒第二陣、岡山・龍野二藩を同応援とし、越前藩に大坂出兵を命じた。また、福山藩を石見口第一陣、浜田・津和野二藩を同第二陣、鳥取・松江二藩を同応援とし、和歌山藩に同口への出兵を命じた。更に、伊予松山・宇和島二藩を上関口第一陣、徳島藩を同第二陣、中津・今治二藩を同応援とし、熊本・柳河・小倉・千束・安志・五藩を下関口第一陣として小倉に出兵させ、福岡・佐賀二藩を同第二陣、岡・鳥原二藩を同応援とし、薩摩藩を萩口第一陣、久留米藩を同第二陣とすることを沙汰した。幕府は五方面からの進撃を企図し、西国有力諸藩に動員を命じて、その威容を整えることに腐心した。

この間の中央政局は、長州再征や条約勅許に反対する薩摩藩を軸に展開をしており、一会桑勢力だけでなく、在坂老中や朝廷においても、薩摩藩の動向を注視していた。特に会津藩は薩摩藩の取り込みを画策しており、慶応元年十月十一日、公用人・御間番御内用兼務の外島機兵衛が薩摩藩士藤井

良節を介して大久保一蔵に面談を申し入れた。会津藩の重鎮が大久保邸まで自ら赴くことは異例であるが、この間の長州再征や条約勅許を巡る周旋の苛烈さによって、大久保の存在が知られた証左であろう。

翌十二日、外島は大久保を訪ね「既往之事は無是非候間、何卒何も被為捨置今日を機会として、改而為天下御尽力被下度²」と協力を求め、「尊藩之動靜ハ天下之動靜に關係いたし候間、即今御尽力ニ御振はまり相成候得ハ、諸藩則影来する勢ヒハ顕然たる事候間、実ニ天下之為与思召御尽被下度²」と、薩摩藩の動向が諸藩に影響を与えることになるので、直ぐにでも幕府のために尽力してくれば、諸藩はそれに倣うことは間違ひなく、天下のためとなると述べる。そして、「久光公為天下基本ヲ被為開御鼓舞相成候而社今日ニ至り候訳、昨年長州犯闕之砌も為尊藩主人職掌も相立候御恩も有之、益々主人も御依頼申上今日ニ至り候而は、尚以御見込之処も承り尽力いたし候趣意」であると、薩摩藩・久光を持ち上げて薩摩藩の意向に沿いたいと言言を弄した。

つまり、会津藩は「是迄之事ハ過り候間、爾後合力同心為天下尽したし」と、これまでのことは謝罪するので水に流し、今後は薩摩藩と力を合わせて天下のために尽力したいと申し入れた。これに対し、大久保は「天幕之大嫌疑ヲ蒙り尤諸藩之疑惑も請候得は、両寡君（久光・茂久父子）趣意も有

之大事之節、天朝御奉護丈ヲ相勤よと差出たる訳に而、成程家老始上京いたし居候得共右趣意を奉する外無之心得罷在候、尤人心人望ヲ得不申候而中々尽力出来候者ニ無之、益天幕之御趣意ニ触害有而寸益無之訳ニ候」と、朝幕から嫌疑を受け、諸藩からも疑惑を向けられており、これ以上の嫌疑を受けないために朝廷の奉護以外にあり得ないと突っぱね、更に会津藩の動向を詰問して外島を閉口させた。

その場で大久保は更に勘考するとしたものの、翌十三日、外島に書簡を発して「寡君趣意も有之、御大事之節天朝奉護丈ケを相勤候様申含候筋合も有之、且亦今日を機会トいたし何様尽力いたし候而宜舗力蒙味之弊藩ニ而ハ、一圓見据付兼適為天下不被為捨置被示聞候義則可応其意之処、却而否申上候ハ御氣之毒千萬ニ候得共、前條之次第故御断申上候」と、会津藩の申し出を完全に拒否している。そして、久光からは朝廷守護のみ命じられており、しかも薩摩藩は蒙味なので何をすべきか分からないと会津藩の申し出を重ねて峻拒した。全く隙を与えない断固とした態度であり、会津藩は糸口すら見出せない有様であった。

一方で、外島から大久保と面会したことを聞き及んだ朝彦親王は、「種々令晰候由、幸甚々々³」と、その会談を評価している。外島がどの程度、真相を語ったかは不分明であるものの、朝彦親王が薩摩藩の取り込みを期待していたことは間

違いない。こうした中で十月二十五日、小松帯刀・西郷吉之助は率兵上京したため（以降、小松率兵上京）、幕府などから後述する嫌疑を受けており、中央政局に更なる波紋を呼ぶことになった。

中山忠能は手記（十月^④）に「此度東寺へ追／＼上京致候者、小松惣督之由」と記し、率兵上京した司令長官は小松であるとし、これが事実であれば「矢張三郎同意之事と相見候」と、小松率兵上京はこの間の薩摩藩の中央政局での周旋活動を容認した、久光の意向を反映したものであるとの認識を示す。なお、これは小松が久光の名代であるとの前提を基にしており、中央政局における小松の重要性を示唆する。そして、「其上昨年々高崎も兩人（高崎正風・五六）共西郷の下二周旋致居候よし深く疑候へ者、又三郎の狂言にてハなく哉と存候へとも、長とハ和睦調候趣二候間惣而説替二相成候事哉」と、昨年から西郷の下知で周旋する高崎らを深く疑い、久光の狂言ではないかとしていたが、長州藩とは和睦が成立したため、すべての方針が変更になったのではないかと訝しむ。

また、「此度小松上京何等の義申立候哉会々薩へ内々聞合ニ先日來候処、返答ニハ少し存より有之近く上京候へとも御談申入候訳ニハ無之、一藩々申上候次第ゆへ御心配御無用之旨答候よし」と、今回の小松率兵上京の目的を会津藩から京

都薩摩藩邸に問い合わせを行った。その際、薩摩藩からは少々思うところがあつての率兵上京ではあるが、諸藩と談合はせずに薩摩藩単独で建白する積りであり、心配は無用であるとの回答であつたとする。

朝彦親王も薩摩藩の動向に注目しており、十月二十四日に議奏六条有容・久世通熙から大原重徳が薩摩藩等と謀議を図っていると聞き及び、翌二十五日に会津藩公用人小野権之丞に対し、「大原之密談密計之不行様手アテ^⑤」することを申し付けた。また、十一月七日には慶喜家臣・川村恵十郎に対し、朝彦親王から直々に「薩之義探索申付^⑥」けている。それにしても、朝彦親王から直接一會桑勢力の家臣に様々なことを命じていることから、両者間の癒着ぶりが確認できる。いずれにしろ、小松率兵上京に対する朝幕双方からの関心と警戒の高さが窺えよう。

なお十一月七日、老中本莊宗秀は小松帯刀・島津伊勢・大久保一蔵を招請し、それに応じた大久保を引見した。「鳥取藩廟記録」（十一月九日条^⑦）によると、記録方周旋方・伊王野平六が西郷吉之助から直接聞いた話として、大久保は拝謁早々、「私儀逆上の宿僻御座候処、近來再発、耳少く遠く御座候間、其段御含置被下段様」と聾哑者を装った。本莊は次の通り、徳川・島津両家の因縁の深さを説き、特に依頼する旨を告げて、腹藏なく政局について述べるように懇切丁寧に

説論した。

貴藩之儀者鎮西之大藩ニ付、於幕府兼て御依頼被成候者勿論之事、其上天祥院様に就ては、御近縁の事故、別て御親睦之間柄、然ル処、世上に色々の流言行れ、貴藩に限らず、嫌疑トカ申候離間の説不少候得共、幕府に於て、左様の事は決て無之、貴藩は別ての儀に候故、其辺少しも御懸念無之様、又前申通り、大樹公にも格別に御依頼に思召有之事故、少しも御隔意無く、近來の形勢に就て、利害得失御見込の処、無服臆被申候様致度

これに対し、大久保は聞き間違いの体を装い、「左すれは、薩州を御誅伐被成候趣之御沙汰に御座候哉、左様も御座候得は、何時にても御相手に相成可申間、左様思召被下候様にと相答候処」、本荘は色を失い、「左様の訳にては毛頭無之、ケ様々と、再三大音にて市藏の膝へすり寄、御説得に相成、漸く御実情を聞取り候姿ニ持成」という醜態を演じた。幕府の老中に対して、大久保はこのような不遜な態度を示しており、薩摩藩の対決姿勢を読み取ることができる。

ところで、小松率兵上京は諸侯の間でも注視されており、例えば広島で情報探索にあたっていた土持佐平太に対し、芸州藩若年寄・辻将曹から「此御方様御人数式千人余被御差登、就ては右御真意之程分兼、幕役等より彼是御嫌疑之廉有之、夫故一橋侯御残御在京之趣風説有之、如何之御模様候

哉」^⑤との問い合わせがあった。これによると、薩摩藩は二千もの藩兵を上京させたが、その真意は分かりかね、幕閣からは何かと嫌疑を受けている。そのため、慶喜は不測の事態に備えて長州再征には出陣せず、在京するとの風聞があるが真相はいかであるかを問われた。

土持は状況が分からないながらも、回答せざるを得なかったとして、「御国元之左右相絶、更ニ何も不相分取約難」と前置きした上で、「併兼て非常御警衛之御為、已前より聊之御人数御差登相成候へ共、今度摂海江夷艦渡米紛擾之形勢、長征処ニは無之云々、当国江致布流候事件、御国許江も彼表より疾相響キ候処より、為御念重て御人数被爆登候哉」と、長州再征に関わることでなく、外国艦隊の摂海闖入の報を受けて慎重を期しての率兵上京ではないかと推論を述べる。

続けて、「且又天氣御窺旁之御為太守様御上京被仰出候哉ニ、於当所取沙汰之通、自然無御延引被遊御上京候ニ付ては、何れ御多勢御召連ニも相成候故、御供方御人数之内、御先ニ御差登被成候事共ニ可有御座哉」と、藩主茂久のこの間の朝廷に対する御見舞いのための上京が藩内に布告され、その御伴の一部が先行して上京したのではないかとし、「両件顯然之事ニて、曾て御疑念之訳有之間敷候」と、これ以外の疑念を受けるような事由はないと断言する。そして、「将蒸艦より式千人出京と申も、浮説と相聞れ、迎も千人ニも不至

候哉と致推量候」と、喧伝されているほどの大兵团が上京したのではないとの見解を示した。

しかし、「多人数罷登、御疑心着眼之程何分承度申試候処、其趣意柄は不相分候へ共、幕府而已ならず不審抱キ候国柄等も有之様子之段、彼表より極内申越相成候間、御互ニ無隔心、何事ニ不寄御心得之端ニも相成候事実は、御内通可致、芸侯一藩當時之国論ニ応し、不取敢早々相洩し可然」と、多人数が上京したため、事由は定かではないものの幕府のみならず諸侯にも不審を抱かせてしまったと、京都より内密に情報が齎された。ついでには、芸州藩とはお互いに隔心を抱かず、何事も意思疎通を図りたいと申し入れ、辻より了解を得ている。薩摩藩の動向がいかに諸侯の耳目を集めていたかが確認できよう。

小松率兵上京後の十一月時点での中央政局について、薩摩藩側の分析として、西郷は「守衛の人数御練り出し相成り候処、大いに勢いを張り、進退去就の速やかなる処、出没計られずとの趣大いに申し触らし、恐れをなし候模様^⑩に御座候」と薩摩藩の勢威が伸長しており、幕府は薩摩藩の神出鬼没な行動に翻弄され、恐れをなしていると評価する。そして、「一・会・桑の作略も皆崩れ立ち、天下の人心も相離れ、致し方なき処より頻りに会人此の御邸へ出で、媚び候事共笑うに堪えず候」と、一会桑勢力もなす術がなく、前月の外島機

兵衛の大久保への勸説以降も、会津藩士は薩摩藩邸に伺候して媚を売っており、笑止千万であると突き放した。

続けて、「是迄幕府の術、強藩と申せば直様嫌疑を掛け、色々の流言をはなち、内輪混雑を成さしめて、其の虚に乘じ好言を以解き破り候手段に御座候処、今や手術を失い、あき果てたる様子と相聞かれ申し候」と、これまでの幕府は力を付けて来た雄藩に対しては、直ぐに嫌疑をかけて様々な流言を流して内部対立を引き起こす。そして、その隙に乗じて雄藩の勢威を削いできたが、今となつては何の術もなくあき果てた状態である。しかも、「長征の事に付いても頓と策を失い、永井主水正等広島迄差し遣わし、詰問は相叶わず、伏罪致したとの一言を謂わせたきとの賦にて、段々媚を求め候様子に御座候」と、幕府の策略のなさを痛烈に批判した。

そして、「此の夏時分召し捕えられ候長人赤欄武人等の者を、永井は召し列参りたる由に相聞かれ申し候、是等は至極幕中の秘事と相聞かれ申し候」と、幕府の機密情報を暴露し、「実に危然たる向きにて、橋・会・桑困窮の事に御座候由」と一会桑勢力の困窮ぶりを揶揄する。しかも、「いづれ大樹公には、大坂より逃げ下りの模様と相窺われ申し候、橋・会より関白殿下へ、大坂より罷り下られ候方に申し上げ候との説もこれある事に御座候、大坂においても糧食も乏

敷、当年中相支え候儀も六ヶ敷、況や西に兵を進め候儀、万々覚束なき事と相聞かれ申し候」と、將軍が江戸に逃げ帰る、幕府が関白に下坂するよう要請した、といった流言を紹介し、大坂の兵糧が乏しくて年内を支えることもままならぬ中で、長州征伐は不可能であると断じた。

更に、「攻口等の儀各藩へ通達相成り候え共、人数を繰り出せと申す儀はこれなく、手数迄の計にて、退き口の謀と相察せられ申し候、此の上戦を初め出し候わば、直様紛乱の勢い眼然に相見得申し候」と、幕府には戦意がなく、開戦すればかえって幕軍は混乱を来すと述べる。そして、「幕府において摂海異人の談判に益不条理を顕わし、朝廷を欺き、人心の憤怒を重ね、長征にて兵勢の衰を示し、条理を失い、且つ勢いを失い候ては、如何の作略を用い候ても行われず、如何なる智者ありとも引き起こし候儀は覚束なき次第に御座候」と、幕府の失態を挙げ連ねて、幕府の行く末は覚束ないと断言する。よって、「此の時に当りては理を尽して進み、勢いを詳らかにして動くべき事と存じ奉り候」と、薩摩藩としては至理至当の論に従いながら、勢威を示して行動すべきであるとの意向を示した。

この段階で、西郷が長州征伐の実行を強く疑問視し、幕府は自然と向こうから倒れるとしており、「当分の処一言発すれば、名分大義を明らかにし、義を以て立ち確乎として動か

ず、諸藩を圧倒いたし候姿もこれあり候、変に入る入らぬの境肝要の場合にて、至極謹慎を加え、評議を尽し候事共に御座候」と、泰然自若として大義名分を明らかにし、慎重に構えることを宣言していることは注目に値する。この時期の西郷に、武力発動による抗幕姿勢を見ることはできない。

一方で、薩摩藩は幕府の動静に目を光らせており、例えば、十一月九日に突然海路で上坂した若年寄田沼意尊（相良藩主）に関し、西郷は在坂の黒田清綱に対し、「兵庫開港の儀欺謀を以て異人と約条いたし候故、関東において大いに物議沸騰の様子に相聞かれ候に付き、其れ等の事か、又は迎船共にてはこれなく候や、何等の事か御探索成し下されたく合掌奉り候」と、その上坂事由の探索を依頼している。ここでも、西郷は將軍家茂の帰府の可能性を示唆している。こうした幕薩対立は、中央政局における最大の懸案事項に昇華し、特に薩摩藩と会津藩の軋轢は日増しに緊迫感を呈する状態になった。

2 越前藩による幕薩対立への対応

慶応元年十一月二十日、広島に派遣された永井尚志らは国泰寺において、長州藩使者宍戸備後助（機）を尋問し、翌二十一日に尋問書を下付して答申を求めた。二十四日に至り、

宍戸は答弁書を提出して藩状を陳情し、併せて再征の方針を非難し、藩を挙げ断固として屈しないとする姿勢を示した。また、晦日には長州藩使者木梨彦右衛門および諸隊代表の河瀬真孝・井原小七郎・野村靖を国泰寺で同様に審問した。尋問内容は藩主が萩でなく山口に滞在していること、山口城を修理したこと、武器を外国商人から購入したこと、大坂まで使者を派遣しなかったことなど、多岐にわたったものの極めて穏便なやり取りに終始した。永井は最初からそのような態度で臨む方針であったが、その後、一会桑勢力との齟齬を生じる要因となった。

十二月十一日に至り、永井は審問の終了を告げて宍戸・木梨らに帰藩を命じた。宍戸・木梨は引き続き広島に滞在して幕府の裁決を仰ぐことを許可され、河瀬ら諸隊代表は帰藩した。そして十六日に永井らは広島を出発し、翌十七日には大坂に帰著、十八日に大坂城に登城して札問の顛末を復命した。老中板倉・小笠原らの在坂幕閣は永井の復命に基づき長州藩の処分を議し、幕軍の士気の低さ、諸侯の反対などに鑑み、十万石削減、藩主毛利敬親の隠居、世子広封の相続という寛典論に決した。そして、在京の一会桑勢力との摺り合わせを行うことになるが、後述の通り、両者の妥結は容易ではなかった。

これに対する長州藩の対応であるが、十二月二十四日、木

戸孝允・山田宇右衛門・広沢真臣・中村誠一は広島に滞在する小田村素太郎・赤川又太郎に書簡を發し、幕府が藩境に配する兵を撤退させなければ、末家・家老の上坂を命じられても拒否し、また、削封等の幕命あった場合は幕府軍と決戦するとの藩廟の決定を伝えた。小田村らはその決定を前提としながら、広島に留まり情報収集を継続した。

ところで、幕府・一会桑勢力と薩摩藩の確執は、長州再征・条約勅許を巡って決定的となったが、その後も両者、特に会津藩と薩摩藩の対立は潜航しながらも拡大の一途をたどった。將軍家茂の辞職騒動に端を発した幕府人事の刷新によつて、新たに老中職に就いた板倉勝静・小笠原長行にとつても、薩摩藩の動向は常に監視の的となっていた。幕府の警察網をフル稼働させて、その動向を逐次注視していた。そうした中で、十二月五日、二老中は松平春嶽に対して書簡¹²を發し、久光に対する曉諭を依頼した。

これによると、將軍から二老中への長州再征の委任は至つて重大事件であるが、將軍家は「御若年」であり、殊の外心配されており、大任を命じられた二老中は「微力薄才」で何事も行き届かないため、春嶽に深く信頼し助言を賜りたいと深甚な信頼を示す。薩摩藩については、「素々忠勤を不思議ハ有之間敷候得共、藩士等之欺妄を受候歟、又ハ末節之利害二走り候歟、疑敷形勢無之ニもあらず」と、久光に対する嫌

疑を腹藏なく述べる。そして、通商条約の勅許を奏請した際には、「御所ニ而疾ニ御評決無之も、全く薩藩士之進説故と申事ニ取沙汰仕候」と、薩摩藩による横槍を指摘して不快感を露わにした。

続けて、「右様之儀ニ而は御進発相成候共、何歟策を設妨碍を生し可申哉も難計深懸念仕候、さすれば天下静謐之期限も相延いつか萬民塗炭を免れ可申哉、実ニ可憐恤之至ニ奉存候」と、長州再征における薩摩藩の妨害工作を深く懸念し、それによって天下が静謐になることは先送りされ、庶民の苦しみは実に憐れむべきであると訴える。ついでには、「彼藩之本源心腹を御曉諭被下候ハ、彼偏固之見疑難之跡も自ら瓦解氷积奸猾之間談必然遠り可申候、然る時ハ実ニ天下萬世之洪福と奉存候」と天下万民のため、春嶽による薩摩藩への曉諭を依頼した。

これを受け、十二月八日に春嶽は本多修理・酒井十之丞・中根雪江らを召して要職会議を開催し、本件への対応を議した。中根が鹿児島に使者を派遣して久光に直接問うか、または在京の小松帯刀を福井に招致して問うか、いずれかであると発言したところ、本多以下は「幕府は如何なる方法を以て島津家に曉諭せしめんとせらる、目的なりやと、閣老に質問してハ如何¹⁹」と応じた。春嶽は後者を選択して中根に出坂を命じ、翌九日には二老中に対してその旨を申し送った。

一方で、会津藩からは薩摩藩と情誼が著しく阻隔し、現在では胸襟を開いて談話することは絶えており、これは「大隅守殿の意より出てかゝる景況に至りたるものか将當時在京の藩士小松帯刀・大久保市藏などの意より出てしかるものかを疑ひ」、春嶽より久光に親書を送って問合せをして欲しいとの依頼がなされていた。越前藩内では、長州藩処分について、会津藩は開戦を、薩摩藩は寛容を主張して二藩の情誼が阻隔していることは明らかであるとして、その依頼を拒否すべきとの意見があつたものの、会津藩からの再度の依頼には黙止し難く、十二月十一日、春嶽は以下のような久光宛書簡を發した。

幕茂何角御多難之御成行候へは、乍恐朝も亦難被安世態、津涯も見へ兼、日夜恐悚案旁之外ハ無御座候、帯刀も又々出京之由承及候、依旧兼而之御国論相含周旋尽力無毫遺義と想像、依頼罷在候、扱々前後天下之形勢転変御互ニ及御論談、兼而期したる事とは乍申、今更驚愕浩歎之事而已、兎角は禿筆愚文之及ふ所ニも無御座候故、云々ニ付し不能委曲候、猶御明晰御確論も御座候ハ、御垂示之程奉仰希候

これによると、朝幕共に多事多難の状況であり、日夜恐怖に戦き心配が絶えないと現在の心境を述べ、小松が上京したことを聞き及び、薩摩藩が国事周旋に尽力することは疑いも

なく、今まで通りに依頼していることを表明した。そして、朝政参与の時期に国家のための尽力しようと約していたが、このところの政局の大変化には驚愕しており、春嶽自身が出る幕はないとし、政局をどう分析してどうしようとしているのか、久光に対して垂示を懇請した。内容的にも表現的にも、極めて穏便でさしたる切迫感のない遠慮した書簡である。

ところで、こうした薩摩藩の動向に対する嫌疑は江戸でも喧伝されていた。当時家茂の侍読を務めていた高鍋藩世嗣の秋月種樹書簡（松平春嶽宛、十一月十八日⁽¹⁵⁾）によると、「佛蘭西ハ幕府を信し候得共、英夷ハ殊之外疑ひ幕より薩を信し候よし、薩分も英ハ八十人程傳習ニ遣し候由、殊之外懇信之由風聞仕候、夫故幕ニ而も色々議論起り候よし」と、人数には誤謬があるものの、薩摩スチューデントの動向をキャッチしており、英国と薩摩藩の接近を警戒している。また、「薩家来小松帯刀大島吉之助上京之由何も謀議仕候段、何卒幕を佐け候様仕度候反覆表裏ニ而は心配仕候」と、小松率兵上京を不安視している。

更に、「御藩へも大久保一蔵罷出夫故種々之御混雜を生し、九月中御上京御決し之処某々公之御疑念ニ而途中中御引返し之由、御苦心想像仕候、乍去御貴戚之内ニ而御嫌疑起り候而は徳川氏之御中興乍恐無覚束、何故ケ様相成候歟と甚以恐入

定而讒人之使然と奉存候」と、大久保の来訪によって越前藩に嫌疑がかかったことを大いに憂い、頼みの春嶽に幕府への疑念が生じるようであれば幕府もこれまでと嘆じる。そして、「薩も何故ケ様所々へ遊説仕候歟可怪事ニ御座候」と、その原因を作った薩摩藩の諸藩への遊説を厳しく非難した。

中根雪江の上坂に先立ち、毛受鹿之助は中根の周旋を容易にするため、十二月十三日に閣老の内意を確認しようと下坂し、板倉勝静に謁見して今回の春嶽への依頼について問い質した。毛受は越前藩と薩摩藩は多年親密であり、その内情は心得ており、薩摩藩には疑わしい陰事などなく、鹿児島が遠隔のため在京藩士が一存で決行することはないとは言えないが、久光は決して軽々しく変節することはないと述べる。そして、会津藩の要望に応じて久光に書簡を発する予定であるが、更にどのような手段をもって周旋をすべきか、予め教示して欲しいと迫った。

板倉は「薩に陰事の疑ふべき形迹ありとにハあらねと、国家多事の今日穩かならざる所為なしとせず、故に兼ねて御入魂の大蔵太輔殿より御文通あらは必らず返翰を出し、其衷情を申遣ハすへしとの考案にて、直書を進呈せしなり」と、薩摩藩への嫌疑があるということではないとしながらも、警戒心を吐露して春嶽からの文通を期待し、その返信に見られる久光の心情を推し計りたいとした。よって、毛受は文通の有

無の確認をするとして退いた。

十五日に上京した中根は毛受から板倉会談の内容を確認の上、十九日には大坂城内で小笠原長行に謁見し、春嶽から久光への書簡は十一日に発しており、更に認めるべきかを確認した。小笠原は「目下薩藩に棄置かたき程の形迹ありとにハあらざれと、稍不審と認むる廉なきにあらず、故に此際大蔵太輔殿より御直書を以て、徳川家と島津家とは広大院様天璋院様の御続きありて外ならぬ御間柄なれば、速に天下を治平に帰する様力ある様にとの意を程よく御示談あらん事を望ミ」、依頼したと述べ、これ以上の直書は不要であるとした。

一方で、小笠原が薩摩藩の内情を中根に問い質したところ、大久保一蔵の福井への来訪は周知であろうと断った上で、大久保の意見として、「已に斯の如き形勢に至れる上ハ、不日大樹公にハ旗旗を進めらるゝなるへし、然るに天下の人心大概ね再討の挙を非とする今日なれば、強て旗旗を進められても御成功ハ殆んど覚柄なし」と、長州再征の失敗を予言する。そして、「天下の大兵を挙げ剩へ大樹公旗旗を進められし上、果して御成功に至らせられずハ、幕府の權威ハ今度限りにて地ニ墜ち天下ハ忽ち四分八裂なるへし、されハ此節は幕府に於て深く人心の帰向する所ニ注目せられ聊も粗暴の挙に及るへきにあらず」と、その失敗による内乱の勃発を危惧するとの薩摩藩論を伝えた。

また、ここ最近の重なる嫌疑により、いかに良策を建白したところで薩摩藩だけでの尽力では到底採用などされないとの判断から建白は中止している。しかし、このように切迫した政情にも拘らず、いたずらに傍観することは不本意であるとし、在京重臣の決議によつて久光の上京のみならず、春嶽と伊達宗城の上京も画策して使者を派遣したとの大久保の意見を伝えた。なお、三侯が上京して必死に尽力しても幕府の採用なく、長州再征が実行された場合は天下の大乱となることは間違いないく、そこで朝廷を守護すれば万が一、三侯の建白が幕府に取り上げられなくても、無益なことにはならないとの薩摩藩論であり、春嶽も同意見であると述べた。中根は薩摩藩には「毫も不良の心底はあらざりしなり」と擁護し続けた。

しかし、小笠原は納得せず、「されと過般来小松帯刀多人数を引連れ、殊に大砲をさへ備へて在京すとの事なるか此事ハ何事の爲めなりや尚不審なり」と、小松率兵上京および武装兵の滞京への嫌疑を示した。これに対し中根は、最前も申した通り、薩摩藩論はもはや天下の大乱は回避できないとの意見であり、また、兵庫沖に外国軍艦も停泊しており、いづれにしろ兵数も大砲も必要であるとの心得である。加えて、「其頃幕府ハ威力を以て朝廷を壓せられ、二條殿下御落飾賀陽宮御幽閉あるへしなとの訛言も行はれし故、萬一其事あら

はとの内意ありしやも測られず、又薩と会とは従来意見を異にする故会に対して或ハ兵成を示す意もあるへし」と幕府の対応を暗に批判し、また薩会両藩の不和が原因であると指摘する。

小笠原は「薩と会とハ懇信の間柄と聞しに近來ハ殊の外矛盾のよし、如何なる子細ありてならん」と薩会の最近の確執の原因を尋ねたところ、中根は長州藩処分について、会津藩の「討伐」と薩摩藩の「安撫」の両論が対立していることは周知の事実である。しかも、第一次長州征伐においては、「薩士兩三輩死地に入りて周旋し遂に降伏謝罪に至り、一旦は十か九まで薩の意見も行ハれしか、其後再征討仰出され其周旋ハ忽ち徒勞ニ歸し、今日の姿にてハ更に会の意見に従ハるゝ事となりし故、薩か会に対して不平を懷くも其理なき事とハ思ハれず」と、薩摩藩の心情を代弁し擁護する發言を繰り返した。

これに対し、小笠原は会津藩より薩摩藩に歩み寄ろうとしても、一切取り合わないのみならず、薩摩藩は天下の嫌疑を受けており、もはや何事にも手出ししないとまで小松が申し張るのは何故かと切り返したところ、中根は薩摩藩を嫌忌するのは会津藩のみではないとの実情を示す。現在は世上の議論が会津藩の「討伐」と薩摩藩の「安撫」の二途になって対立しているため、薩摩藩を嫌忌する者も多いが、会津藩を嫌

忌する者も少なくないとする。

つまり、「薩会の不和ハ薩会の不和にあらずして、実ハ天下の不和なりされは幕府にてハ深く此所に御注目ありて天下の調和を図らるゝか肝要なるへし」と、両藩の不和は両者間に止まらず、実は天下の不和であり、幕府は深甚に注意を払って天下の調和を図ることが肝要であると意見した。この段階で薩会両藩の確執が政局全体に悪影響を与えるとの認識に至っており、しかも老中に薩会間を取り持つように依頼していることは注目すべきである。最後に、中根は久光からの返信があつた場合は提出すること、また、以降の久光への直書は草稿を以て事前に相談することを約し、更に大久保忠寛と勝義邦の登用を切に依頼して退席した。

このように、閣老は抗幕姿勢を強める薩摩藩に対する対抗措置として、友好関係にある一門の越前藩に依頼しており、その内容は国許にある島津久光に対する説論によつて、在京藩士の過激な行動を押さえることに主眼があつた。依頼を受けた越前藩は、八月十八日政変以降、主として朝政参与において薩摩藩・久光とは友好関係にあり、「幕私」を批判し続ける春嶽は、密に「抗幕」体制を採る久光とは目的は相違するものの、長州再征に対する反対行動においても連携していた。そのため、幕府から薩摩藩を抑える存在として期待されたが、他方、幕府に意見することを憚らないその姿勢から、

あらぬ嫌疑を受ける事態となり、難しい舵取りを迫られていた。その越前藩に頼らざるを得ないほど、幕府には残された策がなかった。

なお、十二月三日に両老中は肥後藩京都留守居役の上田久兵衛らを召し呼び、「坂下良馬潜匿之一条、薩人之謀略等密々下問¹⁶」している。このように、藩同士といった大局においては越前藩に依頼しながらも、薩摩藩士として暗躍する坂本龍馬の動静と言った目の前の嫌疑については、関係が深い肥後藩に頼っている情勢があった。しかし、極めて有能で多大な信頼を置いていた上田が熊本に召還されることになったため、幕府は自ら強権を発動せざるを得なくなり、その結果が坂本襲撃という寺田屋事件に発展する。幕府の薩摩藩に対する警戒は抜き差しならないレベルに達していた。

3 長州藩処分決定を巡る中央政局

慶応元年十一月、大目付永井尚志、目付戸川忠愛・松野孫八郎は札問使として広島に派遣され、尋問終了後、十二月十七日には大坂に帰著、十八日に大坂城に参上して札問の顛末を復命した。長州藩処分決定について、老中板倉勝勝・小笠原長行らの在坂幕閣は二十一日に永井を上京させ、慶喜を中心とした一会桑勢力の意向を確認させることにした。慶喜

らは永井報告を踏まえて長州藩の処分を議し、二十五日には小笠原・永井および若年寄稲葉正巳らを広島に派遣して再び札問することを決し、一会桑勢力として申し入れたが、在坂幕閣の同意は得られなかった。

慶応二年一月七日、板倉・小笠原が大坂より上京し、翌八日以降に慶喜邸において、一会桑勢力と長州藩処分について議論を繰り返した。在坂幕閣は領地十萬石の削減、藩主毛利敬親の隠居、世子広封の相続という寛大な処分案を提示したが、一会桑勢力、とりわけ慶喜は強硬に反対し、再度の尋問、領地は十五萬石のみ、藩主父子の隠居を主張して譲らなかった。会談は決裂し、將軍家茂の決裁を得るため、十日に板倉らは下坂してしまった。

この間の中央政局における薩摩藩の動向であるが、慶応二年一月一日、幕府・薩摩藩間の融和に意を用いていた越前藩士中根雪江は、小松帯刀を寓居である近衛家別邸に訪ね、時勢に対する意見を尋ねた。中根は前年十二月に小笠原老中に面談した際、幕府の薩摩藩への嫌疑緩和に努めたものの、小笠原の小松への不審が継続しているため、直接小松から意見を聞いた上で、再度小笠原に弁解して不審を氷解しようとしていた。小松は「弊藩ハ御案内の如く、種々嫌疑を受け居困難少からず、されと嫌疑の如きは今更致し方なき¹⁷」と幕府から嫌疑を受ける苦衷を述べる。

小松は続けて、「此節時事の爲め周旋奔走の勞を執らざるも、決して度外視するにあらず、條理に就かれざる幕議を贊助すれば共に條理を失ひ、到底天下の爲め益なきのみならず、却て害あらん事を恐れてなり」と、現在は国事周旋を行っていないが、決して国事を度外視しているわけではない。至理至当でない幕議に従えば、薩摩藩も共に至理至当を失つてしまい、天下のために益になるどころか、かえって害になることを恐れるためであると、国事周旋に積極的でない事由を述べる。

そして、「若形勢いよく一変して尽力すへき時機到来せは、更に力を尽すへし、しかし最早藩士限りにては行届くへきにあらざる故、大隅守に上京を申立る積りなり」と、形勢に変化があれば尽力するが、その際には最早藩士では埒が明かないため、島津久光に上京を進言する積りである。この間も度々上京しているものの、その成果は十分とも言えないため、「容易にハ動かれざるへけれど、其機已に熟せんには、必らず動かれざるにあらずるへし」と、前向きな姿勢を示す。そして、「其際ハ大蔵太輔殿にも是非御上京あらん事を希望す」と、久光上京に合わせて松平春嶽も上京することを希望し、中根の同意を得た。小松は久光上京を中央政局の打開の突破口として期待しており、翌慶応三年（一八六七）の四侯会議を想起させる。

なお、小松は「今日まで少かの兵を率て在京せしハ、窃に幕府の御爲にもと思ひての事なるか、当正月中又ハ二月中旬頃まで滞在して、此上の形勢を考へ、矢張優柔不斷ならば速に帰国して、已に着手せし海軍の整頓を圖るへき心算なり」と、一月または二月中旬まで在京した上で、幕府の優柔不斷さが解消されない場合は、速やかに帰国して既に着手している海軍整備に尽力したいと明言した。小松の帰藩時期については、この時点ではまだ明確になっていないことが窺える。

また、小松は長州藩処分内容について、「御所置は何程を相当とすへき」「如何所置せられなは、天下目を刮りて威服すへきや」と重ねて中根に問いかけている。これは、中根から幕議の状況を探り、かつ越前藩の方針を確認するためであったが、中根はこのような重大事を我々が議すべきではないとしながらも、「此度の御征討ハ已にも申せる如く、名義明かならず、幕府の御失体少小ならされは、深く御反省、天下目を刮りて威服する程にあらされは、更に物議を惹き起すへし」と、具体策までは明言しなかったが、長州再征の反対を明示し、幕府の失政を厳しく非難した。

ところで、当時の越前藩の藩論を中根の建白書（一橋慶喜宛、一月二日）^⑧で確認しておこう。「幕府之御威權ハ朝廷之御依頼と天下諸侯之服従とにより成立候御義に候処、此度之御親征ハ乱臣賊子之罪状分明に御開示無御座候故、朝廷にて

も御憤然御誅伐を被為思召候程之御様子二も不奉伺」と、幕府の權威は朝廷からの依頼と諸侯の服従から成り立っている。しかし、長州再征は罪状が明らかにされていないため、朝廷も断然誅伐をしようという様子ではない。また、「天下諸侯二においても、御名義不明之物議紛興二及び、恐れ多き申條二御座候得共」、幕府は孤立した様子であり、既に「御実体之御威權ハ御離散」の様相であるとして、長州再征に反対する事由を述べる。

また、長州再征を強行すれば、「皇国萬安太平之氣象一變し不測之動乱に及び、朝廷之御危難ハ元より、諸侯之困弊生民之疾苦不可救」の情態を惹起してしまい、將軍家の衰退の端緒になる。そして、「徳川御一家之御私事之様に当候故、朝野ともに御所置之当否を傍觀危懼之體態ニ有之、如何程強暴にもいたせ長防之一藩堂々たる幕府之御權力を以御手下し之上、萬々一にも御手違被為在候而ハ、真に御当家も夫限り之御事なるべく」と、長州再征は徳川家の私事にあたるため、朝廷も諸侯も傍觀しており、世情が危ぶまれる事態である。そして、万が一にでも長州再征が失敗に帰した場合、將軍家もそれ限りであると切言する。

加えて、「先ツ勤王之御條理を明らかにせられ、正人君子を廟堂へ被集諸藩之人材も被召寄、公共之御政法を以天下諸侯之人心を御收攬被遊、幕府之真威力を御恢復被遊候義第一

等之御急務」と、最初に勤王の条理を明らかにし、賢侯を廟堂に集め諸藩の有能な藩士も招き寄せ、至理至当の論によって諸侯の人心を収めることによって、幕威を真に回復させることが一番の急務であるとする。その上で、「大膽父子を初暴慢不順之罪逆を天下に鳴らし天下に議せられ、至当之公論を以朝廷へ御伺之上之御所置と相成候御義、御全策にも可被為在歟与奉存候」と、長州再征はそれからでも遅くないとし、至理至当の論によつて朝廷に伺いを立てた上での処置であれば問題ないと建言した。

つまり、越前藩・松平春嶽は大義名分がはっきりしない長州再征を急ぐことは得策でなく、朝廷や諸侯も必ずしも承服していない状況での再征では徳川家だけの私戦となってしまう。ついでには、有力諸侯とその藩士を招集し、そこで議論を尽せば至理至当の論として朝廷から積極的に受け入れられ、朝廷・幕府・諸侯が一体化できる。長州再征といった国事に関することはこうした枠組みの中で解決すべきであるとの見解であった。これは薩摩藩・島津久光と同じ政見であり、両藩が連携できる素地があった。

一月二日、大久保一蔵は吉井友実・内田正風を同行して中根をその寓居に訪ねた。大久保は「昨日小松より聞し趣に異なる所なく、時機を見合す積なり¹⁹⁾」と、昨日小松が述べたことと相違なく、薩摩藩としては政治活動を控えている。そし

て、「方今京師の形状朝廷ハあれともなきに齊しく、百事一会桑の心のまゝなるよし如何にも憤激に堪へず」と、現在の京都情勢は朝廷は無きに等しく、すべて一会桑勢力の意のままになっており憤懣やるかたないと憤慨する。一方で、「今日大坂より大久保越州上坂せりと報し来れり、此人上坂したらんには幕府の議も何とか面目を一新すへきか」と、大久保忠寛の上坂を歓迎、幕議変更を期待した。

また、大久保が「長防の御所置を橋公ハ如何目的を定め居らるゝならん」と探りを入れたところ、中根は「此程拝謁して伺ひしに、殊の外困却せらるゝよし、再三仰せられたり」と回答した。大久保は「橋と会とハ同意見なるへきや」と再度尋ね、中根は「互に不満なきにあらざるへけれど、各孤立してハ力足らず故に忍て相容れ相助け居らるゝなるへし」と、必ずしも一枚岩ではないが、それぞれが孤立しては力が発揮できないため、仕方なく連携しているとの見解を示した。

更に、内田が「橋公ハ諸侯伯の巨擘なる事勿論なれど、会桑二侯ハさして有力の御方とも承らず、専ら藩士の議を以て事を行はるゝにハあらざるや」と、慶喜は諸侯の中でも巨頭であることはもちろんである。しかし、会桑の二侯はそれほど有力な諸侯とは聞き及ばず、専ら藩士の意見で出処進退を図っているのではないかと尋ね、中根は「如何にも申聞ら

るゝ通りなるへし」と率直に回答している。薩摩藩は一会桑勢力の勢威を非常に警戒しており、その内部状況を該勢力にも近い中根に探りを入れたのであろう。なお、中根が大久保に帰国する時期を尋ねているが、「形勢を見計ふ為今しはらく滞京する積り」であるとしており、この段階では大久保の帰国もまだ議論されていないことが窺える。

一月四日、中根は小笠原と大坂で会見し、小松と面会した時の内容を開陳した。小松が上京後、他藩士と面会せず、面会しても意見を述べないことについて、中根がその主意を尋ねたところ、「今回の御進発は幕府の御失体なりと見込ミ居る事故、他人に面会して意見を述べんとすれば、先幕府の御失体を論せざるへからず、さて御失体を論する時ハ、自然人心を煽動する筋に当り幕府の御為め毫も益なきのミならず、却て大害を惹き起すへく」と、長州再征を幕府の失政と位置付けるものの、他藩士に開陳することは徒に煽動することにもなりかねず、それは幕府のためにならないばかりか、かえって大害を引き起こすことになりかねないと小松は述べる。

加えて、「本藩ハ諸方より嫌疑を受居る今日なるか、いよく嫌疑を重ぬるに至るへきかとて、固く手を引き黙々に日を送り居るなり」と、薩摩藩は方々から嫌疑を受けており、この上嫌疑を重ねてしまうと考え、固く引き籠っている。

る。そして、今後は越前藩が述べるような至理至当の論に従い、全てのことに關して条理に基づいて行動する決心であるとの小松の意見を伝えた。それに対し、小笠原は「しか事実を承ハレは一理なきにあらざるのミならず、却て面白き所あり」と一定の理解を示した。

その上で、小笠原は中根に対し、①小松の率兵上京時の引率およびその他在京藩士の人数、②小松が長崎に立寄った時期および会見したのはイギリスの公使または領事か、③小松の幕府への異心の有無の三点を尋ねた。①について、小松から引率したのは百余人と聞いているが、その他は推測と断りながら、九門警衛のため岡崎藩邸の隣地を求め練兵をしており、その数およそ三百人ほどなので、都合四五百と回答した。

②について、長崎には「当春^{マヤ}」に寄港し、既に面識がある領事であると聞いており、③について、幕府への異心など決してある筈もなく、既に申し上げているように赤心を吐露すれば、「幕府を正す事となりて穩かならず、其上嫌疑を重ぬへし、又幕府を賛助せんとす如き主意に外ならすれば御失体と見込居る故、却て今日に在ては御益とならざるへしといへる如き主意に外ならず」と、繰り返し薩摩藩の主張を展開した。小笠原は「薩の情状を委ハしく知らざりし故配慮せし事少なからねと、今日詳細なる物語を聞きぬれハ今後紛紜の議

あるに方り大に説解の具を得たる心地せり」と感謝の念を示した。

このように、中根は薩摩藩のために何度も老中に対して、薩摩藩を庇護する意見を具申しているが、これは至理至当の公論によって、幕政を行うことを企図した越前藩と方向性を同じくする薩摩藩を稀有のパートナーと認識している結果である。一方で、幕閣にとつても越前藩を介して、薩摩藩の内情を探ることは必要不可欠であった。小笠原の関心が在京藩士の数や小松が会ったイギリス要人にまで及んでおり、しかもメモまで取りながら中根の発言を聞いている事実は、薩摩藩に対する過剰なまでの警戒感を窺うことができる。

さて、在坂幕閣と京都の一会桑勢力、特に慶喜とは長州藩処分の内容を巡って鋭く対立をしていたが、事態の悪化を憂いた松平容保・定敬は両者間を調停した。その結果、一月十九日に至り板倉・小笠原は再び上京して慶喜らと協議した結果、十万石削減・藩主父子隠居の折衷案で妥協した。二十二日、朝彦親王・晃親王・関白二条斉敬・右大臣徳大寺公純・内大臣近衛忠房、権大納言一条実良・九条道孝および議奏・武家伝奏等が参内し、そこに一会桑勢力・両老中も加わり御簾前での朝議があった。幕府の妥協案を基に十万石削減、敬親を蟄居・隠居に広封を永蟄居に処すことなどが聴許され、ここによりやく長州藩処分は正式な決定を見たことになる。

なお、鹿児島に向かうため二十二日に大坂に到着した大久保から面談を求められたため、中根は翌二十三日にその旅宿を訪ねた。大久保は長州藩処分について、「御所置の寛猛に拘はらず、一昨年伏罪陳謝せし時に立ち戻りたる御所置にならされは、矢張異議あるへし、此節の幕議ハ削地廢立の事あるよしなるか、是ハ薩も同議なり、唯條理のある所如何により異議を立ざるへからず」と、第一次長州征伐の解兵時に長州藩が服罪した段階に立ち戻った処置でないと異議があると明言する。そして、薩摩藩も領地削減・藩主交代は是としているが、その事由如何によつては異議を立てざるを得ないと迫ったため、中根は情報収集を約束した。

また、大久保は大原重徳が「開鎖の事を周旋すへしと申されけれと断然辞し、又討幕の論ありけれと是も弁論に及へり、要するに幕府に対してハ異議なけれと條理を失はるゝに至りてハ議せざるを得ず、されは幕府の議此上公論を容れられ橋公にも文久度の如くならんには隅州にも必出府尽力せらるへし」と、大原からの要望や討幕の議論を拒否したことを伝えた。そして、幕府に対して異議はないとしながらも、至理至當を失った場合は議論せざるを得ないとし、幕府が公論を受け入れ、慶喜も文久改革時に立ち戻れば、久光も出府して尽力するであろうと述べた。更に、大久保は「大久保一翁勝阿波守の両氏を除きて幕府に其人あるへからず、此両氏を

登庸せらるゝと登庸せられざるとハ天下人心の嚮背に關係す」と、大久保忠寛および勝義邦の登用の斡旋を強く依頼している。

大久保は木戸孝允の上京および「小松・木戸覚書」の成立を秘匿しながら、中根に奏聞の経緯及び結果に関する探りを入れており、これに対して二十四日には、中根は大目付永井尚志から長州藩処分に関する幕議の事情を確認した。そして、永井の了解の下で「一昨年二立戻り御初征之御趣意を以て御所置相成候歟之様子二而候」と大久保に報じ、薩摩・越前藩の思惑通りに進む可能性を示唆した。また、大久保・勝の幕政参画については、越前藩も賛同して周旋をしており、勝登用については現在評議中である旨伝えている。

越前藩・中根雪江は在坂閣老からの依頼を受け、薩摩藩を懐柔して幕府との対立緩和に努めたが、長州再征には反対の立場であり、また、寛典処分を志向しており、更にはこれらを諸侯会議によつて決定すべきと言う薩摩藩の藩是に基本的には同意していた。勢い、板倉・小笠原の両閣老や慶喜との会談では薩摩藩の弁護に努め、かつ長州藩対応や大久保・勝の登用等に関して、幕閣の意に反する意見を繰り返しており、越前藩にも嫌疑が生じる可能性を孕んでいた。越前藩の国事周旋は必ずしも幕府の期待通りに推移したとは言えず、中央政局が混沌とした中で、幕府は長州再征という陥穽に陥

ることになる。

4 小笠原長行の下向と薩摩藩の動向

慶応二年二月二十三日、前日の長州藩処分の内容決定を受けて、老中板倉勝静・小笠原長行は京都を発して下坂し、その旨を将軍家茂に復命した。二十六日、幕府は小笠原に對し、広島に赴いて長州藩主毛利敬親・広封父子に処分を申し渡すことを命じ、大目付兼外国奉行永井尚志・大目付室賀正容・外国奉行兼軍艦奉行木下利義・勘定奉行兼大坂町奉行井上義斐らに随行を命じた。また、板倉に軍事取扱を、老中本莊宗秀に大將軍進發随從を命じ、若年寄遠山友詳を同用掛とし、翌二十七日に本莊および老中井上正直も同用掛を命じた。

二月二日、家茂は直書を小笠原に下して長州藩処置の全權を委任し、かつ、陸軍奉行に達して後列第十六番隊の内、持小筒組三小隊大砲二座および歩兵二大隊を小笠原に附属させ、広島に下向させることを命じた。翌三日、家茂は小笠原の下向にあたり、召見して短刀を下賜し、慶喜もまた愛馬を贈って餞別とした。四日、小笠原らは大坂を発し、七日に広島に到着した。小笠原の広島下向は幕府にとって長州藩への最後通牒となり、絶対に失敗は許されない事態を自ら招いて

いた。

同時に、この事態は朝幕が一体化して推し進めているものであるため、小笠原は朝議が動揺して梯子を外されることを極端に恐れた。よって、二十三日には一会桑勢力それぞれに書簡を発し、広島下向後の状況を報じ、当事者以外からの歎願によって廟議の変更がないことを欲しており、朝彦親王・二条斉敬にこれを建言することを懇請した。小笠原は広島 of 空気が極めて厳しいことを実感したことも相俟って、こうした懇願を繰り返した。

二月二十二日、小笠原は芸州藩主浅野茂長に命じ、長府藩主毛利元周・清末藩主毛利元純・徳山藩主毛利元蕃・岩国領吉川経幹、家老穴戸親基・毛利元統の広島出頭および中老屋穴戸備後助に広島滞在の命を伝えさせた。これに對し、備後助は芸州藩經由で小笠原に末家・家老らは全員が病氣であるため、幕府の召命に應じることは難しいと回答し、滞在中の藩士木梨彦右衛門の進退について問い合わせた。三月二日、芸州藩は末家・家老らに周旋すること、木梨は任意に帰藩して構わないとの小笠原の回答を伝えた。なお、備後助は小田村素太郎を帰藩させて、広島における幕情および対処意見を藩廟に報告した。

この間の薩摩藩の動向であるが、二月一日、中根の訪問を受けた小松は小笠原下向に関し、処分内容を伝達しても、

「二州の士民容易に承伏すましと考へらるゝなり」と、長州藩は簡単に承諾しないであろうとの見込みを示した。事由として、第一次長州征伐の終了直後であれば、領地削減も当然のことであり、その間周旋に尽力していた岩国・吉川経幹もその覚悟であつたが、「今日ハ形勢一変して前日に同しからず」状況である。しかも、諸隊からの寛典ということは現状維持であるとの申し出に対し、永井は了解の意向を示しており、経幹も今回は「別段の寛典ならされは人心承服すまし、人心若承服せされは止を得ず、本藩と、もに事に従ふ外あるへからず」との意気込みであると述べる。

小松は続けて、幕府はこの期に及んでも長州藩が「矢張異議なく御請に及ふへき御見込にハあらざるか」と質問したため、中根は「幕府ハ御受に及ふへき御見込かと想像せらるゝなり」と回答した。それに対し、小松は「さてハ別に御密策にてもあるものか、若御密策なくは、彼れの容易く承伏せざるは明らかなる事故、直に御討入の外あるへからず」と、幕府に秘密の一策があるのかと訝しみ、もしないのであれば長州藩の拒否にあつて、戦争になるとの見通しを示した。

一方で、長州再征となつても、前回とは相違して「今日ハ時勢一変せし故一藩たりとも二念なく徴に応ずへしどハ思はれず、已に或藩にてハ過般來出兵せざるに決し居るとの事なるか此藩ハ幕府の親藩なり、然るに尚斯の如し、況や外藩を

や定めて御目的違に至るへし」と、激変したこの時勢において、親藩すら出兵を拒否している有様である。況や外様藩の出兵を要請しても期待外れになると、厳しく幕府を突き放した。

小松は「小松・木戸覚書」の成立過程で、木戸から断固とした拒絶姿勢を聞き及んでおり、交渉が決裂することを察していた。幕府が処分内容で譲歩するなどの密策がなければ、とても収まりがつかず、かといって戦争するにしても、幕軍は士気が上がらず、出兵する諸藩も少ないであろうとの見込から、落しどころが見つかからない隘路に嵌まり込んだ、幕府の絶体絶命の状況を的確に捉えていた。

なお、中根は同日、慶喜に対して小松の見解を伝えた上で、「最早幕府限りにハ其所置を決せられず、有名の諸侯及ひ有志の士を召集して公議に付せられ其議の帰着する処に隨て御所置あるへし、果してしかる時ハ更に討伐せらるゝも必勝を得へく、最早討伐せられさるも天下ハ屈服すへし」と、諸侯・有志会議の開催を提唱して長州藩処分を決定すべきである。そして、征伐となれば必勝でなければならず、また征伐とならなくても国内は納得すると論じた。

それに対し、慶喜は幕府の人材では解決策を見いだせないもので、松平春嶽を始めとして島津久光・伊達宗城・長岡良之助（肥後藩主）らを参集させて議論させ、「従来の幕私を

去り公平至当の国是を立つへきか」と賛意を表した。そして、小松は本件について何と言っているかを中根に尋ね、「専ら公議を以て御論定ある様にと希ひ居るなり」との回答を得た。慶喜も薩摩藩・小松の存在を十分に意識せざるを得ない様子が窺える。

また、中根はここでも慶喜に対し、大久保忠寛と勝義邦の登用を執拗に求めた。中根自身も両者の力量は十分に理解し、当然登用すべきとの意見ではあったが、「神祖を始め御累世の明將軍も雄藩制馭の術には、深く御心を用ひられしものと推量せらるゝ事なるか、目下此兩人を登庸せらるゝ事ハ、即雄藩を制馭せらるゝの一術なるへし」と、薩摩藩を始めとする雄藩制御のためでもあるとの認識は留意すべきであろう。

小松は小笠原の広島下向に対し、長州藩に処分を伝達しても拒絶するのは目に見えているので、幕府には何か密策があるのではないかと訝しんでいるが、これは在京要路に共通した認識であった。西郷は蓑田伝兵衛宛書簡（二月六日）において、「此の度は幕府においては、万万戦を始め候様子相見得申さず、此の度の所置を申し付け候て、承服致さざる儀は相知れ居り候わん、定めて何とか上手に策を廻らし候事もこれあり候わんかと、申す訳に御座候」と、幕府が長州再征を実行することは方が一にもないと断言する。一方で、幕府も

長州藩が処分内容を承服する可能性がないことは承知しているはずであり、今回の処分伝達は幕府に何か上策があつてのことであろうかと小松同様に述べる。

桂久武は蓑田宛書簡（二月六日）において、「長防人心如何候半、別て難渋之訳と相考へ申候、とても幕府戦争之はまりとハ更ニ不相見得、幕府にて極寛大之御所置と見込候様子坎、畢竟尾老候御建議之跡をふまへ候筋かと申事ニ御座候」と長州藩が受け入れるとは思われないとの見通しを示す。そして、それ以上に幕府には戦争をする意思があるように見えないとし、幕府は今回の処分が第一次長州征伐からの妥当な流れと判断しているのだらうと現実的な見解を述べる。

続けて、「よもや只今二てハ、千万承諾之処無覚束、若哉其通不参候てハ、実ニ大変ニ御座候、一度戦ひを初候てハ、此末いかんとすること不能ニ立至り可申、慨歎至極ニ御座候」と突発的な幕長開戦の可能性に言及し、深甚な不安を示した。一方で、薩摩藩に対する幕府の嫌疑については、「幕中大ニ沸騰いたし居候由、乍然此度大久保越州登坂以来、委く説得相成、今ハ何之訳も無之由」と、大久保の幕閣への入説によつて、雲散霧消したことを中根から小松が直接聞いたとの事実を伝えた。

小笠原の下向後、西郷は「弥伺い通りの所置を以て参り候えば、決して承服は仕らざる事は、幕府においても疾存知の

訳と相考え申し候、然しながら戦を始め候様子更にこれなく、就いては何ぞ細工をいたす賦かも知れざる事に御座候²⁶」と、今回の処分内容の伝達では決して長州藩は承服しないことは幕府も理解している。しかし、戦争を始める様子は更になく、恐らく何らかの細工をする積りであろうと述べる。そして、「先ず此の所置は表通りの訳にて、大赦とか何とか申すものを以て、至極寛大なる所置に出で候も計られざる事に御座候」と、今回の処分内容は表向きのことであり、実際には大赦を施して極めて寛大な処分であることを収めようとするのではないかと推断した。

薩摩藩の在京要路は小笠原の下向、処分伝達、長州藩の拒絶、大赦（更なる寛大処分）、長州藩の受諾というストーリーを描いており、この段階に至っても幕長開戦の可能性は低いと捉えていた。この樂觀論は西郷らの様々な分析によるところであったが、例えば、「諸藩の模様も余程相変り、幕威の衰弱を真に知り、嫌疑を掛けられ候ても、思わ敷ないものと合点いたし候様子と相伺われ申し候」と、諸藩は幕威が衰えた実情を知ったため、嫌疑をかけられても長州再征には加わらないと判断している。

また、「若しや戦相始まり候わば、諸方に蜂起致すべく、甲・信二州の辺にも其の萌相顕れ候由、一度動き立ち候わば、瓦解致すべき事と存じ奉り候」と、もし開戦となれば民

衆の蜂起は避けられないと指摘する。そして、既に甲州・信州にはその兆しが見られ、一度蜂起が起これば幕府は瓦解せざるを得ないとしており、幕府の事情に止まらず、諸侯や民衆の動向まで踏まえた見通しであった。これまでは、民衆蜂起に言及していることはほぼ見られず、薩摩藩・西郷の視角として注目に値しよう。

このように薩摩藩は、幕府は長州再征に踏み切らないと確信していたが、その思惑を遥かに超え、実際の政局は激流に飲み込まれていく。慶応二年六月七日、幕府艦隊による周防大島への砲撃が始まり、十三日には芸州口・小瀬川口、十六日には石州口、十七日には小倉口でそれぞれ戦闘が開始され、第二次長州征伐（幕長戦争）が勃発した。

幕府は小笠原老中による最後通牒という切り札を切っており、朝幕ともに後戻りできない状況に自ら陥っていた。そのため、十分に戦略を吟味することもなく、止むにやまれぬ開戦となり、しかも、七月二十日には將軍家茂が大坂城内で逝去する悲劇も重なり、長州藩にもやの大敗北を喫する。こうした幕府最大の難局にあたり、いよいよ中央政府に將軍慶喜が登場することになるが、幕府・慶喜は薩摩藩を始めとする西国雄藩と離合集散を繰り返すなど、幕末最後の激動の時代が推移することになる。

おわりに

幕府は長州再征の勅許を獲得したものの、その真意は將軍進発を実行せず、なるべく寛大な処分案を提示して長州藩との妥結を図り、長州藩から服罪使を派遣させることによって戦争を回避することにあつた。そのため、慶応元年（一八六五）十一月に大目付永井尚志らが広島に派遣されたが、期待した支藩主・宗家家老は病気を事由に参着せず、使者や奇兵隊幹部のみとの尋問に止まつた。

永井の報告を踏まえ、老中板倉勝静・小笠原長行は十萬石削減、藩主毛利敬親の隠居、世子広封の相統という寛典論に決し、在京の一会桑勢力との摺り合わせを図つたが、嚴罰処分を望む一橋慶喜らとの調整は難航を極めた。事態の悪化を憂いた松平容保・定敬による両者間の調停により、慶応二年（一八六六）一月に板倉・小笠原は再び上京して慶喜らと協議した結果、十萬石削減・藩主父子隠居の折衷案で妥協し、朝議において聴許されてようやく長州藩処分は正式な決定に至つた。

長州藩処分の内容決定を受けて、小笠原は長州藩主毛利敬親・広封父子に処分を申し渡すため、二月七日に広島に到着した。小笠原の広島下向は幕府にとって長州藩への最後通牒

となることは自明であり、絶対に失敗は許されない事態を朝幕ともに自ら招いていた。薩摩藩は「小松・木戸覚書」の成立過程で、木戸から断固とした拒絶姿勢を聞き及んでおり、交渉が決裂することを察していたが、幕軍は士気が上がらず、出兵する諸藩も少ないであろうとの見込から、幕府は結局のところ、幕長戦争を回避するのではないかと確信していた。

この間の幕府にとつての難問は最大の抵抗勢力とも言える薩摩藩の動向であつた。長州再征や通商条約の勅許問題において、薩摩藩は抗慕的な姿勢を露わにしており、長州問題を始めとする内政の安定のためには、どうしても薩摩藩を諭旨し、少なくとも懐柔して幕府の諸政策に理解を示させる必要があつた。薩摩藩の動静が注目されていた証左として、十月の小松率兵上京に対する関心や嫌疑が見られ、その対象は朝彦親王や中山忠能などの廷臣、芸州藩辻将曹、家茂侍読の高鍋藩世嗣秋月種樹らにまで幅広く及んでおり、特に機内政権の中樞にいた老中板倉勝静・小笠原長行の嫌疑は著しく大きかつた。

そのため、老中本莊宗秀や会津藩公用人外島機兵衛は薩摩藩に直接アプローチして大久保一蔵と会見に及び、また、板倉・小笠原両老中は薩摩藩・島津久光と友好関係にあつた越前藩・松平春嶽による諭旨を依頼した。これを受け、春嶽は

重臣會議を開いて議論した結果、老中の真意を確認するため、中根雪江を上坂させることとしたが、一方で、会津藩からは繰り返し春嶽から久光に親書送付の依頼があったため、春嶽は止むを得ず書簡を発したものの、内容的にも表現的にも、極めて穏便でさしたる切迫感のない遠慮したもの過ぎなかった。

十二月に中根は小笠原老中と会見し、幕府の小松率兵上京および武装兵の滞京への嫌疑に対し、長州再征による天下の大乱は回避できないとの意見であり、更に兵庫沖に外国軍艦も停泊しており、いずれにしろ兵数も大砲も必要であるとの薩摩藩論を開示した。慶応二年一月、中根は小松と会談後、小笠原と再会見し、ここでも中根は薩摩藩の動静を詳しく伝えており、幕府への異心はないと明言した。

また、薩摩藩の抗幕姿勢の誘因として、長州再征における会津藩の「討伐」と薩摩藩の「安撫」の方針の相違による薩会両藩の不和を挙げ、両藩の不和は両者間に止まらず、実は天下の不和であると切言した。この段階で薩会両藩の確執が政局全体に悪影響を与えたとの認識であり、老中に薩会間を取り持つように依頼している。なお、越前藩は大義名分がはっきりしない長州再征を急ぐことは得策でなく、朝廷や諸侯は必ずしも承服しておらず、徳川家だけの私戦となる。ついでには有力諸侯とその藩士を招集し、そこで議論を尽せば至

理至当の論として朝廷から積極的に受け入れられ、朝廷・幕府・諸侯が一体化できると主張し、長州再征といった国事に関することはこうした枠組みの中で解決すべきであるとの見解を示している。

本稿では、在坂閣老は抗幕姿勢を強める薩摩藩に対する對抗措置として、友好関係にある一門の越前藩・松平春嶽に依頼しており、その内容は国許にある島津久光に対する説論によつて、在京藩士の過激な行動を押さえることに主眼があったことを明確にした。これを受けた越前藩・中根雪江の仲介周旋は、薩摩藩を懐柔して幕府との対立緩和に努めたものであったが、極めて薩摩藩に友好的で親和性に富んだ政治的指針に基づいており、老中に対して長州再征を私戦として異を唱え、また、寛典処分を主張した。加えて、薩摩・会津両藩の確執が国政混乱の原基と捉えて関係改善に尽力するとともに、諸侯会議による国事に関する決定を要請したことを指摘した。

このように、薩摩藩の藩是に基本的には同意していた越前藩の周旋は、板倉・小笠原の両閣老や慶喜との会談では薩摩藩の弁護に努め、かつ長州藩対応や大久保忠寛・勝義邦の登用等に関して、幕閣の意に反する意見を繰り返した。こうした越前藩の薩摩藩の藩是を首肯して追隨するような周旋態度は、越前藩にも幕府の嫌疑が生じる可能性があったことを提

示した。

こうした中根の老中に対する薩摩藩庇護の繰り返し返される意見の具申は、至理至当の公論によって、幕政を行うことを企図した越前藩と方向性を同じくする薩摩藩を、稀有のパートナーと認識している結果であったことを論じた。また、幕閣にとつても越前藩を介して、薩摩藩の内情を探ることは必要不可欠であり、かつ小笠原の関心が薩摩藩の動向の細部にまで及び、薩摩藩に対する過剰なまでの警戒感が存在していたことを例示した。また、長州藩に最後通牒するため広島に向かった小笠原の動向について、薩摩藩の在京要路は小笠原の下向、処分伝達、長州藩の拒絶、大赦（更なる寛大処分）、長州藩の受諾というストーリーを描いており、この段階に至つても幕長開戦の可能性は低いと捉えていたことを明示した。

機内政権と言える板倉・小笠原老中を基軸とした幕府本体は、一会桑勢力との難しい調整を繰り返しながら、厳しい政局に対処していた。長州藩処分について、やや寛典に処することを念頭に置く両老中と厳罰を主張する慶喜との対立を経て、決定した処分内容は後者の主張に近いものとなった。そもそも、長州藩はいかなる処分も受け入れない方針であったが、幕府が受け入れ難い処分案を示したことにより、妥協の方策を取ることが叶わず、幕長戦争に突入してしまった。そ

こには、薩摩藩の存在も大きな影響を与え続けており、その帰趨を気にするあまり、幕府はエネルギーを分散し続ける結果を招いた。折角の越前藩の周旋も水泡に帰し、いよいよ幕末の中央政局は最終段階を迎えることになる。

註

- (1) 例えば、佐々木克『幕末政治と薩摩藩』（吉川弘文館、二〇〇四年）、久住真也『長州戦争と徳川将軍』（岩田書院、二〇〇五年）、高橋秀直『幕末維新の政治と天皇』（吉川弘文館、二〇〇七年）他
- (2) 大久保一蔵書簡（十月十三日、伊地知壮之丞・市来六左衛門宛、日本史籍協会叢書『大久保利通文書』一、東京大学出版会、昭和四十二年復刻、三三七～三四二頁。なお、以降特に断りがない場合、正統日本史籍協会叢書とする）
- (3) 『朝彦親王日記』一、昭和四十四年復刻、十月十九日条、四五〇頁
- (4) 『風聞書』（『中山忠能履歴資料』七、昭和四十九年復刻、一五一～一五二頁）
- (5) 『朝彦親王日記』一、十一月七日条、四六六頁
- (6) 『朝彦親王日記』一、十月十九日条、四五〇頁

- (7) 小松らは「不快」(体調不良)を事由に断っているが、在京鳥取藩士の山田佐次郎・西山平吉書簡(藩廟宛、十一月十八日、『贈従一位池田慶徳公御伝記』三、鳥取県立博物館、昭和六十三年、四七一～四七二頁)によると、「薩州小松帯刀、先頃より上京致し居申候得共、病氣を披露して、何方にも参り不申との風聞に御坐候」とある。その後の小松の体調を考慮すると、必ずしも口実とは言い難い。
- (8) 「鳥取藩廟記録」(十一月九日条、東京大学史料編纂所「維新史料綱要データベース」)
- (9) 「在広島土持佐平太防長事情探問報告」(鹿児島県維新史料編さん所『鹿児島県史料(忠義公史料)』三、鹿児島県、昭和五十一年、史料番号七一九、八二八～八三二頁)
- (10) 西郷吉之助書簡(蓑田新平宛、十一月十一日、西郷隆盛全集編集委員会『西郷隆盛全集』二、大和書房、昭和五十二年、七八～八二頁)
- (11) 西郷吉之助書簡(黒田清綱宛、十一月十四日、『西郷隆盛全集』二、八四頁)
- (12) 板倉勝静・小笠原長行書簡(松平春嶽宛、十二月五日、『續再夢紀事』四、昭和四十九年復刻、三七三～三七五頁)
- (13) 『續再夢紀事』四、三七八・三八〇頁
- (14) 松平春嶽書簡(島津久光宛、十二月十一日、鹿児島県歴史資料センター黎明館編『鹿児島県史料(玉里島津家史料)』四、鹿児島県、平成七年、史料番号一四四三、五〇四～五〇五頁)
- (15) 秋月種樹書簡(松平春嶽宛、十一月十八日、『續再夢紀事』四、三八五～三八九頁)
- (16) 宮地正人編『幕末京都の政局と朝廷』、二〇〇二年、名著刊行会、三三一頁
- (17) 『續再夢紀事』五、昭和四十九年復刻、一～五頁
- (18) 「中根雪江建白書」(一橋慶喜宛、一月二日、『續再夢紀事』五、五～九頁)
- (19) 『續再夢紀事』五、九～一三頁
- (20) 『續再夢紀事』五、三七～三八頁
- (21) 中根雪江書簡(大久保一蔵宛、一月二十四日、『續再夢紀事』五、四一～四二頁)
- (22) 『續再夢紀事』五、五五～五六頁
- (23) 『續再夢紀事』五、五八～六〇頁
- (24) 西郷吉之助書簡(蓑田伝兵衛宛、二月六日、『西郷隆盛全集』二、一一四～一一八頁)
- (25) 桂久武書簡(蓑田伝兵衛宛、二月六日、『鹿児島県史料(忠義公史料)』四、昭和五十二年、史料番号五五、

五八、六一頁）

（26）西郷吉之助書簡（蓑田伝兵衛宛、二月十八日、『西郷

隆盛全集』二、一二四、一二七頁）